



農村生活のすすめ

第7回：高齢社会についてのすこし長いコラム

主席研究員 川井 真

目次

- | | |
|------------|------------------------------|
| 1. 日本の高齢化 | 4. 豊かな社会と死生観 |
| 2. 人口転換の理論 | 5. おわりに～高齢社会と
ソーシャルキャピタル～ |
| 3. 高齢社会の本質 | |

1. 日本の高齢化

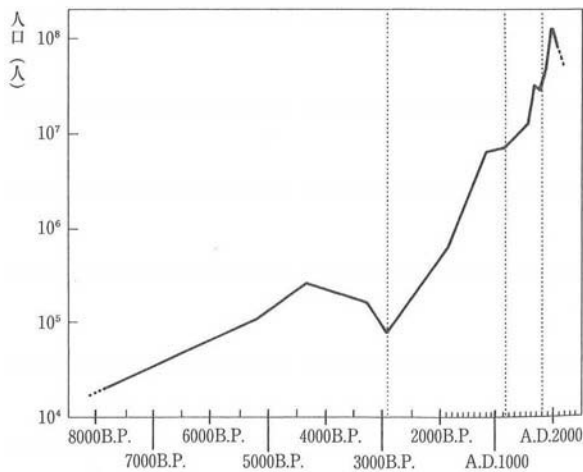
世界保健機関（WHO）の「高齢社会の定義」によると、総人口における65歳以上人口の占める割合すなわち高齢化率が7%を超えた社会を「高齢化社会」といいます。高齢化が進行しつつある社会という意味です。そして、高齢化率がさらに上昇して14%を超えてくると、もはや高齢化の進行が安定期に入ったものとみなされて、名称も現在進行形の「aging society」から過去形の「aged society」へと移行し、いわゆる「高齢社会」になります。ところが日本はこの数値をさらに更新しています。平成26年版高齢社会白書によると、平成25年10月1日現在の日本の高齢化率は25.1%で、これはWHOによる「超高齢社会」の指標となる21%もすでに超えています。日本の高齢化率は今後も上昇し続ける見通しで、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によると、2060（平成72）年には40%近くにまで達するものとみられています。まさに国民の2.5人に1人が65歳以上となり、4人に1人は75歳以上の高齢者になります。これからの約半世紀は、総人口が急速に減少しながら高齢化が進行していく、そうい

う時代を私たちは生きています。まさに、これまで誰も経験したことのない前人未達の地平が目前に広がっています。

2. 人口転換の理論

このようなお話をするとどうしても悲観的になるのですが、ものの見方や考え方を少し変えてみると、とても穏やかな人口変動が起こっている、という捉え方もできるわけです。歴史人口学という学問がありますが、それによると人口増減が引き起こす長期的な波動は文明の興隆と衰退の周期に重なり合っているといわれています。歴史人口学者の鬼頭宏氏によれば、日本列島の人口を過去1万年ほど遡って観察すると、4つの大きな波を描くようにして人口は増加してきたとされています（次頁図1）。縄文時代初期から中期にかけて急増していく人口が、後期から末期にかけて激減していく波。弥生時代から奈良時代にかけて急増していく人口が、その後は平安時代から鎌倉時代まで長期に停滞するという波。そして、南北朝時代に始まり安土桃山時代を経て江戸時代中期にかけて急増していく人口が、その後は江戸時代後期まで長期間停滞す

(図1) 日本人口の長期波動 (縄文早期～2100年)



(出所) 鬼頭宏 (2000) 『人口から読む日本の歴史』 講談社

るといふ波。最後に、幕末から明治・大正・昭和にかけて急増していく人口が、21世紀に入って減少へと転じた波です。歴史人口学的な視座に立てば、なるほど、現代の日本社会は文明の転換点に立っているということになるのでしょう。ただ、これはかなり長期的な時間を凝縮したものなので微妙な変化はすべて消されていますが、日本は短期的な人口減少を幾度も経験してきているようです。人口が大きく減少する要因は自然環境の変化による食料や水の枯渇すなわち飢饉であり、次いで戦争や疫病の流行など、いずれもカタストロフィックなできごとが背景にあります。しかし現代の人口減少はそれとは異なります。背景にあるのは高齢化と少子化です。高齢化という現象が先進国を中心にはじまっていることを考えればわかるとおり、その原因はどうやら人間の心理や行動に起因していて、生活が豊かになったことや、自由を謳歌できるようになったことで、意識的にか無意識的にか出産抑制という行動を選択するようになったからです。出生率の低下が長期にわたって続けば高齢化率は上昇し——そもそも人間の

死亡率は100%ですから——いずれは人口減少に転ずるわけです。そのように考えると、とても自然で穏やかな人口減少といえるでしょう。高齢社会はその過程で起こる一過性の現象のようにも見えてきます。

3. 高齢社会の本質

ただ、事態をあまり悲観すべきではないにしても、楽観的に受け止めることもできません。なぜなら、高齢社会は——少なくとも身体機能的には——虚弱な人びとを相対的に増加させることになるからです。たとえ高齢社会が一過性の現象であったとしても、その時代が、誰もが長寿を祝うことのできる豊かな高齢社会であるためには、身体機能が衰えても安心して暮らし続けることのできる生活環境が全国的に整っていかなければなりません。高齢化にともなって活動の範囲も縮小していきますから、“生き方”と“働き方”を一新するような社会変革の動きが、全国の町や村という単位的生活圏で活発に展開されはじめること、すなわち「高齢社会のまちづくり」が求められているということになるでしょう。現在、日本列島では1億2千万人以上の人間が暮らしているわけですが、それが多いのか少ないのかは議論のあるところですが、国土の環境収容力という観点から眺めれば、それは少し過剰といえるのかもかもしれませんが。しかし、高齢社会において着目しなければならないのは——歳入歳出の指標となる——総人口の推移だけではありません。大切なのは暮らしの場となる“まち”の機能と構造です。そのことからすれば、人口の大半が大都市圏に集中している現在の日本の構造には問題があるといえます。少なくとも健全な社会とはいえません。約10年後に迫ってきた本格的な高齢社会すなわち2025年問題の核心には「団

塊の世代が老いるとき」というテーマが据えられていますが、団塊の世代の大半が大都市圏とその周辺地域で生活していることを考えれば、2025年問題とは都市生活者の高齢化問題であるということがわかります。これまで時間軸で捉えられてきた“団塊”が、いまや「特定の場所への集中」というかたちで顕在化してきたのです。日本の高度経済成長を支えるために全国の農山漁村地域から都市へと移動した人々が、そのまま都市で老いていくことになったということです。日本社会が抱えるこのような——人口の偏在という——不自然な構造が、高齢社会問題をより難解にしてみました、という側面は否めないところです。なるほど、都市が必要としたのは若々しく活発な労働力すなわち迅速かつ効率的な経済活動を展開できる人間でした。したがって、それを期待できない高齢者は——消費者であるということを除けば——居場所を失ってしまう、都市とはそういう場所だったのかもしれませんが。いつの頃からか、都会のニューファミリーと田舎で暮らす老夫婦、という構図が一般化されていくことになりました。その過程で、都市では“老い”や“死”というものも隠蔽されてしまったのです。

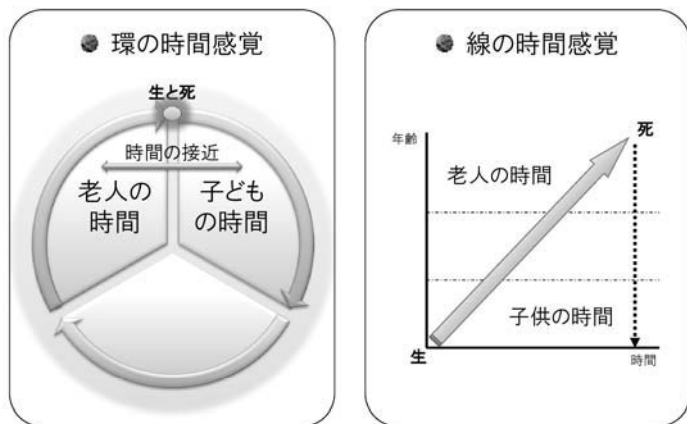
4. 豊かな社会と死生観

人間はかならず老いるし、いずれは死を迎えなければなりません。それを隠蔽してしまうと社会そのものに歪みが生じてしまうのではないかと思うのです。さきほど現代の少子高齢化の背景には、どうも生活が豊かになったことや自由を謳歌できるようになったことが関係しているらしい、と述べました。この「豊かさ」や「自由」という感覚に少なからず影響を与えているのが死生観です。昨今、ジェロントロジー（老年学）やタナトロジー

（死生学）という学問が注目されていますが、これはたんに日本が高齢社会に突入したからという理由だけではありません。現代社会を生きるうえにおいて、死生観を問い直すことにはそれなりの意味がある、と考える人たちが増えてきたということなのでしょう。その意識の背景には“不安”があるのではないかと思えるのです。個人的な見解ですが、真に豊かな社会とは、安心感に包まれた日常のある社会ではないかと考えています。ひとことで言ってしまうと、善良で、世話好きで、機嫌のいい人たちが暮らす社会です。日本の警察や社会保障は信頼に足るものですが、それは万能ではありません。コミュニティ機能が失われ、人心が乱れはじめるとたちまち瓦解してしまうでしょう。

たとえば、人生すなわち人間に与えられた時間には限りがありますが、この時間認識と「豊かさ」や「自由」の感覚にも、どうやら関係がありそうです。あまり意識することはないと思いますが、時間を“環”で捉えるのか“線”で捉えるのか、これについても死生観が大きくかかわっています（次頁図2）。“環”の時間は螺旋を描くようにつながっていく時間で、生と死がとても接近します。古来、日本人の文化的風習には顕著に表れていますが、そこには死者たちの時間も連綿とつながっていて、たとえば彼岸会法要や盆行事などにみられるように、巡る季節に重ね合わせて、死者と生者の交流がおこなわれます。一方、“線”の時間はのびやかに上昇していく力強い時間で、それはポジティブで自立した生き方を象徴しています。したがって“環”の時間が謙虚さや儚さのようなものを内包した調和的な空間をつくり出そうとするのに対し、“線”の時間は自由と永遠を求めるように、外部と一定の距離感を保ちながらプライ

(図2) 時間の認識



バートな空間をつくり出そうとします。このごろは日本でも時間を“線”として捉える人たちが一般的になったように思えます。煩わしさから逃れて自由であろうとすれば、それと引き換えに、あえて不安や孤独を受け入れざるを得なくなった、ということなのかもしれません。しかし現代社会では多くの場合、自由は貨幣と密接に絡み合っています。自由であるためには、もしくは自我の欲求に応えるためには、経済的に豊かであることが条件になってしまった、ということも否めない事実です。

5. おわりに～高齢社会とソーシャルキャピタル～

5～6年前になりますが、ひとり喫茶店で考えごとをしているときに流れてきた竹内まりやさんの曲に、「自由と孤独はふたつでセット、気ままなほど寂しさもついてくる」という歌詞があり、思わず同意してしまったことを憶えています。現代人の抱えるジレンマあるいは内面に潜む感情を、自然かつストレートに表現した、とてもリアリティのあるメッセージに聞こえたからです。しかし、すぐに内省することになります。なるほど、この

歌詞には説得力があつたしかに同意もするのですが、さて、これまで自分は「自由」というものについてまじめに考えたことがあるだろうか。さらには「自由」をどのように認識し、あるいは体感し、幸福や不満や喜怒哀楽の感情を抱いてきたのだろうか、という素朴な疑問がわいてきたからです。

そもそも「自由」とは「不自由ではないこと」を意味しているわけではありません。「不自由ではないこと」を前提に「自由」を定義しようとすれば、それは主観的な問題なので無限に広がっていくことになるでしょう。本来「自由」とは西欧社会の歴史的背景を色濃く残した概念で、他者の支配下におかれ意志や行動が抑圧された状態すなわち奴隷状態からの解放を意味していました。この人権と基本的自由については日本国憲法にも謳われています。国民の自由に関する規定は第18条から第23条に列記されていますが、第18条には「何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない」とされています。この「奴隷的拘束」や「意に反する苦役」という表現は——罪刑法定主義を規定するものとしても——人種差別による殺戮や植民地支配を経験したことのない日本人にとっては違和感のある表現かもしれません。しかし、この条文には自由のもつ大切な意味が込められています。いずれにしても、わたしたちの未来は自由であるべきです。

積極的に他者と関わり合うこと、自分の意思で誰かのために動くことは、かならずしも煩わしさを伴うものではないことを、あらためて確かめてみる必要があります。上述した豊かな社会とは、簡単に言ってしまうと“お

せっかいな社会”なのかもしれません。高齢社会では自由と孤独をセットにするのではなく、豊かさのなかに自由を感じ取れる場所をセットしておくことが、なによりも求められてくるように思うのです。誰かの、あるいは何かの犠牲のうえに成り立つ自由は本当の自由ではありませんし、まわりまわって自分自身を不自由にするにもなります。だからこそ、高齢社会に求められるのは時間を“環”で捉えることのできる感性を、もういちど日本人が取りもどすことだと思うのです。そう確信するのは、“環”の時間の内部で育まれる共通善のようなもの、それが日本のソーシャルキャピタルの源泉だったのではないかと感じられるからです。高齢社会を豊かなものにするためには、日本人が大切に育んできた忘れかけた日本の価値を、あらためて掘り起こしてみる必要があるのではないか、そのように思うのです。

(参考文献)

- ・河野稠果・大淵寛ほか(2002)『人口と文明のゆくえ(シリーズ・人口学研究12)』大明堂
- ・島蘭進・竹内整一ほか(2008)『死生学[1]——死生学とは何か』東京大学出版会
- ・加藤周一(2007)『日本文化における時間と空間』岩波書店